

『シリアへの汚い戦争』——アンダーソン教授“語られざる真実”を語る

【訳者注】戦争にもフェアプレーとファウルプレーはあるだろう。私が盗みをしたとする。私は白を切って世間を騙して成功した。うまくやった。しかし私が、盗んだのは〇〇君ですと言って、善良で恨みもない〇〇君を悪魔化（demonize）して、メディアを使ってこれを宣伝し、うまくやったとすれば、私は相当のワルで、もし真実が顕れれば、徹底して憎まれるだろう。しかし、そもそもファウルプレーとか卑劣といった概念がない、つまり卑劣も卑怯も“辞書にない”世界に、我々が住んでいるとしたらどうだろう？ その場合、私はうまくやった頭のいい奴か、へまをやった馬鹿か、どちらかの評価しかない。我々はそういう世界には住みたくない。しかし現実には、我々はそういう世界に住んでいる。フェアもファウルも新聞やテレビが言わない以上、存在しない。これは悪魔に仕える魔女の世界である。

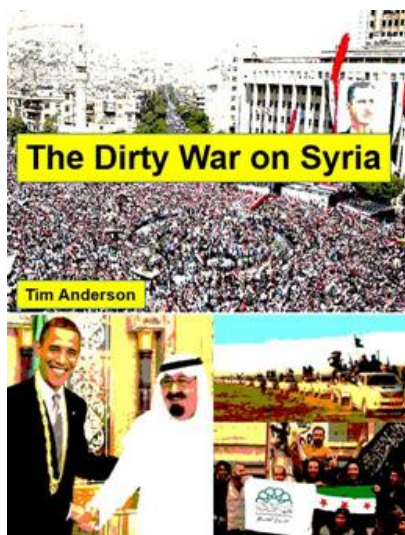
Fair is foul and foul is fair,

Hover through the fog and filthy air.

きれいは汚い、汚いはきれい、霧と汚れた空気の中を飛ぼう——「マクベス」

By Prof. Tim Anderson

Global Research, March 14, 2016



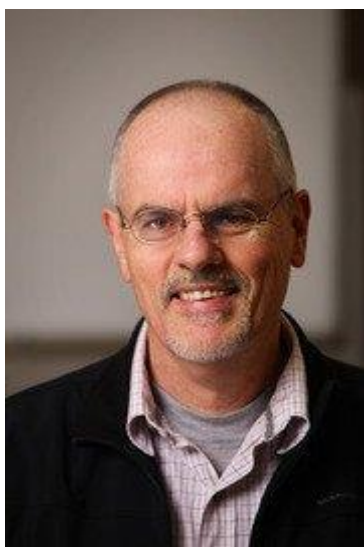
次のテキストは、ティム・アンダーソン教授のタイムリーで重要な著書 *The Dirty War on Syria* の序文からの抜粋である。Eブックは *Global Research* から購入できる。

<https://store.globalresearch.ca/store/the-dirty-war-on-syria-washington-regime-change-and-resistance-pdf/>

どんな戦争でも沢山のウソや騙しを用いるものだが、シリアに対する汚い戦争は、なまの記憶には見られないレベルの、大規模なニセ情報に依存している。英 - 豪のジャーナリスト Philip Knightley は指摘している——この戦争のプロパガンダの典型的な特徴は、敵のリーダーを悪魔化し、次に、本当であろうとウソであろうと、残虐な物語を通じて、敵の人民を悪魔化するという「がっかりするくらい予言可能なパターン」を用

いることである (Knightley, 2001)。そのようにして、態度の穏やかな眼科医であるバシャーール・アル・アサドは、世界の新しい悪となり、一貫した西側メディアによれば、シリア軍は、4年以上にわたって市民を殺すこと以外に、何もしなかったことになっている。今日に至るまで、多くの人々が、シリア戦争は「内乱」、「民衆の反乱」あるいは、ある種の内部セクト同士の争いだと思っている。これらの神話醸成は、過去 15 年にわたって、ウソの口実を用いて、中東地域で一連の“政権交代”戦術を取ってきた強大国にとっては、いろんな意味でかなりの成果だった。

本書は注意深い学術的著作だが、自分の社会と政治制度を決定するシリア人民の権利を、強く擁護するものでもある。この立場は、国際法と人権の原理に一致するものだが、介入することが当然の権利であるかのように思っている西側の人々の、感覚を逆なでするものでもある。時には私は、二枚口舌をぶち切るために、ズバリと言わねばならない。シリアでは、強大国が自分の手を隠そうとし、代理の軍隊を用いながら、シリア政府とシリア軍を悪魔化し、彼らは絶えず残虐行為を行っていると言っている。次には、シリア人民を彼ら自身の政府から救い出すかのように言っている。西側の人々は、イラクの侵略には反対しても、シリアでの戦争に反対することは少なかった。それは彼らが、その本当の性質について騙されていたからである。



Dr. Tim Anderson

汚い戦争は今に始まったことではない。キューバの国家的英雄であるホセ・マルチ (Jose Marti) は、ワシントンに、キューバのスペインに対する独立闘争に介入しようとするだろうと、友人に予言した。「彼らは戦争を挑発しようとしているのだ」と彼は 1889 年に書いた。「それは介入の口実を作るためであり、調停者で正義の保証者だという権威の下に、その国を横取りするためだ。・・・自由な人民の年代史において、これ以上の卑怯なやり方はなく、このような冷血の悪はない (Marti 1975: 53)」その 9 年後、第 3 独立戦争の最中に、ハバナ港で爆発が起こって [訳者: false flag とされる]、米戦艦メイン (USS Maine) が破壊され、258 名の米海軍水兵が死に、アメリカの侵略の口実となった。

アメリカはそれに続く世紀の間、ラテンアメリカへの十数回の介入を行った。記憶すべき汚い戦争の一つは、CIA が援助した、ホンジュラスに本拠をもつ“自由戦士”傭兵隊によるもので、彼らは 1980 年代に、サンディニスタ (反米解放戦線) 政府とニカラグアの人民を攻撃した。この戦争はその形態において、シリアの戦争とあまり変わらなかった。ニカラグアでは 3 万人以上の人々が殺された。国際裁判所は、アメリカが一連のテロリスト・タイプの

攻撃を、小さな中米の国に対して行ったとして、アメリカを有罪とし、ニカラグアに対して賠償責任があるという判決を出した (ICJ 1986)。ワシントンはこの裁定を無視した。

2011年の“アラブの春”とともに、強大国は、政治的に不穏な空気に乗じて、“イスラム主義の冬”を植え付けるのに利用し、この地域にまだ残っていたわずかの独立国を攻撃した。あっという間に、アフリカで最高の生活水準を誇っていた小国、リビアが崩壊した。NATOの爆撃と特殊部隊による攻撃が、地上のアルカーイダ集団を援護した。NATOの介入の基本は、ムアンマル・カダフィ大統領政府によって、実行中か計画されている大量虐殺が、今にも起こるというウソをばらまくことだった。こうした主張は、ただちに国連安保理に持ち込まれ、“飛行禁止区域”によって市民を守るのだと言われた。我々は今、その信用が裏切られ、NATO諸国が限定的な国連の許可を悪用して、リビア政府を崩壊させたことを知っている (McKinney 2012)。

その後、広く言われていたように、カダフィが大量虐殺を考えていた、実行した、あるいは脅した、ということを実証する証拠は、全く出てこなかった (Forte 2012)。アムネスティ・インタナショナル (フランス) の Genevieve Garrigos は、彼女のグループの、カダフィが“黒い傭兵”を使って大量虐殺を実行したという、初期の主張を裏付ける“何の証拠もない”と認めた (Forte 2012, Edwards 2013)。

・・・NATOがリビアを爆撃する2日前、もう一つの武装イスラム主義者の反乱が、シリアの南端の都市 Daraa で起こった。しかし、この反乱は、政治改革運動のデモンストレーションに結び付けられていたために、その性格は隠された。多くの人々は、銃を供給している者たち——カタールやサウジアラビア——が、それぞれの報道チャンネル、アルジャジーラやアル・アラビアで、偽りのニュース・ストーリーを流していることが、見抜けなかった。この戦争の長持ちしている神話の理由は、他にもいろいろある。多くの西側の聴衆は、保守派もリベラルも左派も含めて、外国人を救う者としての自分の役割が気に入っているようであり、ろくに知らない国のことについて義憤を語るが、それは、この新しい“独裁者”に対する“正当な戦い”らしいものに加わることである。使命感と自分の誇り高い自己像をもつ西側の聴衆は、明らかに、前の戦争のウソのことも、自分自身の植民地遺産のことも忘れてしている。

私は、シリアへの汚い戦争において、西洋文化一般がそのよりよい伝統を放棄した、とさえ言いたいと思う。それは理性、倫理的原理の堅持、戦時における証拠の独立した探究といったものを放棄して、最悪の伝統を作ってしまった——深い人種的偏見と、他者の文化の歴史に対する乏しい思いやりに裏打ちされた、介入の“帝国主義的特権”である。この弱点は、猛々しい戦争プロパガンダによって強化された。シリアのリーダー、バシヤール・アル・ア

サドの悪魔化が始まった後、戦時の筋書きを覆す可能性のある、どんなものも通さない、事実上の情報防壁が構築された。

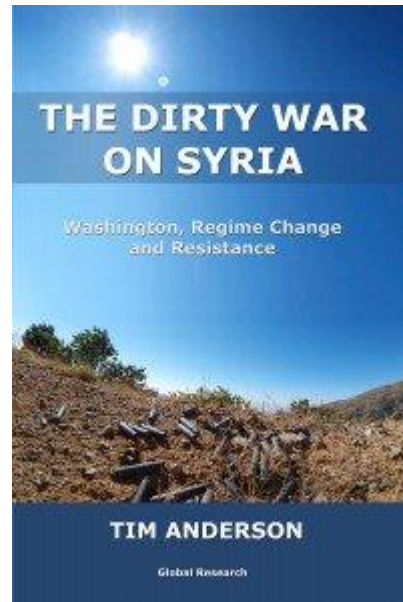
そのようなコンテキストにおいて、私はこの本を書くことにした。それはシリアを弁護するものだが、西洋の神話に浸かっている人々でなく、それと戦っている人々に、主として向けられている。したがってこれは資料本であり、シリア紛争の歴史のために貢献するものである。西洋の物語は自己耽溺的になってしまい、それにあまりこだわるのは無意味だと私は考える。一番いいのは、私の考えでは、ありのままに現在の出来事を語り、その後で“煙幕”について語ることである。私は西洋の神話を無視はしない。実は、この本はその多くを記録するものである。しかし私は戦争の現実の話を続けていく。

西側の神話は、帝国主義的特権の考えに基づいて、他国の人々の問題を“我々”はどうすべきかを問うもので、国際法や人権に全く基づかないアプローチである。次のステップで、口実や、戦争の性格や出来事についての一連のでっち上げを並べる。シリアについての最初の口実は、NATO 諸国や湾岸君主国は、世俗的で民主的な革命を支持していたというものだった。それがもっともらしく聞こえなくなったとき、二番目の物語は、彼らは、抑圧された多数派の“スンニ派ムスリム”を、セクト主義の“アラウィー体制”から救っているというものだった。次に、反政府勢力によるセクト主義の残虐行為が、ますます一般の注目を引くようになると、口実は、影の戦争があるのだという主張に変わった。すなわち、“穏健派”反乱軍は、実は、過激派グループと戦っているのだと言われた。したがって、これらの“穏健派反乱軍”をテコ入れするには、西側の介入が必要で、どこからともなく現れ、世界に脅威を与えている“新しい”過激派集団と戦わねばならないのだ、ということになった。

それは“B級”ストーリーだった。間違いなく、ハリウッドは今後何年も、このメタ-スク립トに基づいて映画を作るだろう。しかしこの本は“A級”のストーリーを続けていく。イスラム主義者の代理軍隊は、アメリカの地元同盟国（主としてサウジアラビア、カタール、およびトルコ）から武器を支給されて、政治改革運動に忍び込み、警官や市民を狙撃する。彼らはこれを政府のやったことだとして、暴動をたきつけ、シリア政府とその世俗・兼任主義国家の転覆を図る。これは、“新しい中東”を創ろうというアメリカの野心の、公然たる宣言に続いて起こり、その地域のあらゆる国家を、改革、一方的武装解除、または直接の転覆によって、従属させるためである。シリアは、アフガニスタン、イラク、リビアと続いて、この次の順番になる。シリアでは、代理軍隊は、ムスリム同胞団（Muslim Brotherhood）とサウジアラビアのワハビ（Wahhabi）狂信団体の混成軍になるだろう。これらの集団と彼らのスポンサー国家の間に、たまに力の闘争があるものの、彼らはほとんど同じサラフィズム（Salafism）のイデオロギーを共有していて、世俗（非宗教）的または国家主義的体制に反対し、宗教国家の建設を求めている。

しかしシリアでは、ワシントン製のイスラム主義者は、多くの挑発にもかかわらず、宗教的ラインに沿って解体しない訓練されたシリア軍と対峙することになった。シリア国家はまた、ロシアとイランという強力な同盟国をもっている。シリアは、リビアの二の舞を演じてはならなかった。この長引く戦争の中で、暴力は、西側からは、市民を狙い殺しているシリア軍が起こしているのだと言われた。シリア側では、人々は毎日、テロリストが町や都市、学校、病院を襲い、NATOの“自由戦士”が普通の人々を大量虐殺しているのを見ており、その後で国軍による反撃が起こっている。外国人テロリストがサウジやカタールによって、何十もの国から募集され、地方の傭兵の数を増やしている。

テロリスト軍団はしばしば、シリアの外では、“反政府軍”、“民兵団”、“スンニ集団”などと呼ばれているが、この国の内部では、現実の政治的反対派は、2011年の初めにイスラム主義者を切り離した。抗議は街から暴力によって追い出され、反対派のほとんどは（ムスリム同胞団といくらかの亡命者を除いて）、国家と国軍に味方している——政権党であるバース党ではないにしても。シリア軍はテロリストに対してこれまで残酷だったが、西側のプロパガンダとは反対に、市民を保護している。イスラム主義者たちは、これまですべての者に対して残忍で、公然とそのようにしていた。何百万という国内亡命した人々は、政府と政府軍のもとへ行き、他の人々は国外へ逃げ出した。



望ましい結末として、強大国はシリア国の転覆か、それがうまく行かなければ、機能不全の国家を作りだすか、または、セクトごとの小国家に分裂させ、独立した地域国家の軸をなくさせるかを狙っている。その軸を構成するのは、この地域でアメリカの軍事基地をもたない2つの国家であるシリアとイランの他に、南レバノンのヒズボラ (Hezbollah) や、パレスチナ・レジスタンスも含まれる。より最近には、イラク——いまだに西側の侵略、大虐殺、占領によるトラウマを背負っている——がこの軸と歩調を合わせ始めた。ロシアもまた、重要な反対バランスの役目を果たし始めた。最近の歴史と行動は、ロシアもイランも、ワシントンやその同盟国とは全く違って、帝国主義的野心のようなものは、全く抱いていないことを示している。後者のいくつか（英、仏、およびトルコ）は、この地域で、かつての植民地宗主国だった。“レジスタンスの軸”という観点から見れば、シリアへの汚い戦争の敗北は、この地域が強大国に対して、結束を固めつつあることを意味する。シリアがレジスタンスに成功するという事は、ワシントンの考える“新しい中東”の終わりを意味する。

これは基本的な全体図である。この本は、A ストーリーを記録し、B ストーリーを暴くものである。それは、よりよい西洋の伝統の、幾分かを救い出すことによって成功する——理性の使用、倫理的原理の堅持、戦時下の証拠の独立した探究。私はこの本が有用な資料になることを願っている。

(ティム・アンダーソン博士は、シドニー大学の経済学上級講師、ラテンアメリカ、アジア太平洋、および中東の、発展、権利、自己決定について研究し、書いている。彼はさまざまな本や学術雑誌に、章や論文を書いており、最近著は *Land and Livelihoods in Papua New Guinea* (Australian Scholarly Publishing, Melbourne, 2015))